

Effect of Experiential Activities in Boy Scout on youth II

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 優 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6389

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響 2 —— 2014 年度および 2015 年度における継続調査による検討 ——

Effect of Experiential Activities in Boy Scout on youth II

田中 優*
Masashi TANAKA

<キーワード>

ボーイスカウト, 体験活動, 生きる力, リーダーシップ, 自尊感情

<要 約>

田中 (2016) は, 学校教育であるフォーマル教育, 家庭教育であるインフォーマル教育, そして, 地域における組織化された教育であるノンフォーマル教育の 3 つの教育の内, ノンフォーマル教育としてのボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響を明らかにすることを目的として, 「2014 年度新多磨地区 BS 山中訓練キャンプ」に参加した 13 歳から 15 歳のスカウト 19 名 (男子 18 名, 女子 1 名) を調査対象として, キャンプの参加前と参加後の I 「生きる力」, II リーダーシップ, III 自尊感情について, キャンプの事前事後での比較をおこなった。本研究は, その 1 年後におこなわれた同様の「2015 年度新多磨地区 BS 山中訓練キャンプ」を調査対象として, 2014 年度 (田中, 2016), および, 2015 年度と継続調査をおこない, ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響に関して, 更なる実証的な検討をおこなった。

* 大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻

1. 問題と目的

田中 (2016) は、学校教育であるフォーマル教育、家庭教育であるインフォーマル教育、そして、地域における組織化された教育であるノンフォーマル教育の3つの教育の内、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響を明らかにすることを目的として、2泊3日のボーイスカウトの訓練キャンプに参加した13歳から15歳のスカウト19名(男子18名、女子1名)を調査対象として、キャンプの参加前(事前調査:2015年2月15日)と参加後(事後調査:2015年3月29日)に質問紙調査を実施し、I「生きる力」:[IKR 評定用紙(簡易版)], IIリーダーシップ, III自尊感情のそれぞれについて、キャンプの前後における差異を検討した。そして、事前調査と事後調査の各尺度得点の差の検定の結果、「生きる力」、その上位能力の心理的社会的能力、徳育的能力、身体的能力、および、その下位能力のいずれにおいても、また、自尊感情においても、訓練キャンプの参加による有意な効果は認められなかった。しかし、リーダーシップの上位指標である集団維持機能、および、その中位指標の「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」、その下位指標の「ユーモア・明るさ」に関するリーダーシップ能力については、キャンプの参加による有意な効果が認められた。すなわち、リーダーシップの集団維持機能の、「場を和ませることができる」といった、「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」や、「ユーモアや明るさ」といったリーダーシップや社会的スキルが向上したことは、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウト教育の有用性と可能性を示唆するものである。

そこで、本研究は、田中 (2016) で調査をおこなった日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区主催の「2014年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」から1年後に実施された、同地区主催の「2015年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」において、2014年度(田中, 2016)、および、2015年度の継続調査を実施し、ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響に関して、更なる実証的

な検討をおこなうことを目的としている。

2. 方法

(1) 体験活動

本研究における体験活動は、日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区主催の「2015年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」で、新多磨地区内の13のボーイスカウト隊から選抜されたスカウトによる2泊3日の野営技能向上、班運営や班長・次長としての意識向上のための訓練キャンプである。

スカウトは、訓練キャンプ(2016年3月26日～28日)の前に実施された2回の事前集会(第1回事前集会:2016年2月14日、第2回事前集会:2016年3月13日)において、4つの混成班に分けられ、班ごとに、班名、班の役務などをそれぞれ決めた。訓練キャンプ(表1)では、班活動を基本として、テント泊にて生活をおこない、班対抗(一部個人対抗)で、野外技能や野営技能を競うゲーム(表2)をおこなった。訓練キャンプの日程、プログラムは、班員どうしの交流、リーダーシップ能力、野外技能や野営技能、スカウティングに対する意識などの向上を趣旨として、参加指導者により、企画、実施された。

(2) 調査対象

調査対象は、日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区主催の「2015年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」に参加したスカウト18名(男子:16名、女子:2名)であった。

(3) 調査方法

調査方法は、2泊3日の訓練キャンプ(2016年3月26日～28日)の参加前(事前調査)と参加後(事後調査)に質問紙調査を実施した。調査では、回答前に、事前調査と事後調査を実施すること、事前事後の調査を比較する必要性を説明し、両調査におけるデータの対応を確保するために、所属・自隊での役務・氏名・年齢・性別への回答を求めた。

(4) 調査期日

表1 訓練キャンプ・日程表

time	1日目 (3月26日)	2日目 (3月27日)	3日目 (3月28日)	
5:30	/	起床	起床	
6:00		配給	配給	
7:00		朝食・サイト整備	朝食・サイト整備	
8:00		点検	点検	
9:00		朝礼・モーニングゲーム	朝礼・モーニングゲーム	
10:00	集合・開会式 オリエンテーション	プログラム 「火熾し」	/	
11:00	設営	衛生プログラム		
12:00	昼食	昼食		
13:00	設営	料理コンテスト (鶏料理)		閉会式
14:00				
15:00				
16:00	食料配給			
17:00	国旗降納	国旗降納		
18:00	夕食	夕食		
19:00	班長訓練 鶏の捌き方	営火		
20:00	班集会			
21:00	班長会議 班会議	班長会議 班会議		
22:00	消灯	消灯		

表2 訓練キャンプにおける野営技能ゲーム

日程	野営技能ゲーム	内容
2日目:午前	火熾しゲーム	火床の上に張られた麻紐を、火を熾して切る早さを競う。
2日目:午前	衛生プログラム	野外料理における食中毒の防止等に関するクイズ
2日目:午後	料理コンテスト	丸鶏1羽を捌いて、3品の料理を作る
2日目:夜	営火(キャンプファイヤー)	班ごとにオリジナルのスタンツを考え披露する。

調査期日については、事前調査は、2016年2月14日第1回事前集会開始時に、事後調査は、2016年3月28日訓練キャンプ閉会式直後におこなった。

(5) 調査内容

調査内容は、事前調査、および、事後調査とも、田中(2016)と同様のものである。

1) 「生きる力」:「IKR 評定用紙(簡易版)」

(独立行政法人国立青少年教育振興機構, 2010)

「生きる力」を測定するために独立行政法人国立青少年教育振興機構が作成した28項目(表3)。「いやなことは、いやとはっきり言える」といった心理的社会的能力(14項目)、「自分かってな、

わがままを言わない」といった徳育的能力(8項目)、「早寝早起きである」といった身体的能力(6項目)の3つの能力で「生きる力」を測定する。各項目に対して、1:まったくあてはまらない、2:あてはまらない、3:あまりあてはまらない、4:少しあてはまる、5:よくあてはまる、6:とてもよくあてはまる、の6件法で回答を求めた。

2) 少年期(高学年)のリーダーシップ測定尺度(国立妙高青少年自然の家, 2011)

国立妙高青少年自然の家(2011)が開発した、青少年の学童期(小学校高学年)に求められるリーダーシップ能力を測定する尺度。三隅(1978)の「PM理論」を基に、「課題達成(Performance)

表3 「生きる力」：「IKR 評定用紙（簡易版）」（独立行政法人国立青少年教育振興機構，2010）

上位能力	下位能力	調査項目
心理的 社会的 能力	非依存	いやなことは、いやとはっきり言える 小さな失敗はおそれない
	積極性	自分からすすんで何でもやる 前むきに、物事を考えられる
	明朗性	だれにでも話しかけることができる 失敗しても、立ち直るのがはやい
	交友・協調	多くの人に好かれている だれとでも仲よくできる
	現実肯定	自分のことが大好きである だれにでも、あいさつができる
	視野・判断	先を見通して、自分で計画が立てられる 自分で問題点や課題を見つけることができる
	適応行動	人の話をきちんと聞くことができる その場にふさわしい行動ができる
徳育的 能力	自己規制	自分かっとな、わがままを言わない お金やモノのむだ使いをしない
	自然への関心	花や風景などの美しいものに、感動できる 季節の変化を感じるができる
	まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる
	思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ 人の心の痛みがわかる
身体的 能力	日常的行動力	早寝早起きである からだを動かしても、疲れにくい
	身体的耐性	暑さや寒さに、負けない とても痛いケガをしても、がまんできる
	野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える 洗濯機がなくても、手で洗濯できる

機能」，すなわち，集団全体で何らかの目標を定めて，その目標に向かって成員を動機づけ，目標を達成させる機能を測定する12項目，また，「集団維持（Maintenance）機能」，すなわち，集団のメンバー同士のコミュニケーションを円滑にさせ，人間関係を良好にし，結束させる機能を測定する8項目の計20項目からなる（表4）。20項目は，「課題達成機能」と「集団維持機能」の2つの上位指標の下に，5つの中位指標として，青少年のリーダー性を特定する要素（資質・能力），すなわち，「困難に自ら立ち向かおうとする力」「計画的に考え行動する力」「情報を収集し，創造力をもって課題を解決しようとする力」「役割を意識し，集団の規範を守る力」，そして，「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」の「リーダーシップ5つの力」に分けられ，さらに，5つの中位指標をそれぞれ2つに分けた10の下位指標，すなわち，「意欲・自立性」「危機意識」「計画・判断」「省察・アクション」「情報収集」「想像力」「役割意識」「規範意識」「伝達・コミュニケーション」そして，

「ユーモア・明るさ」から構成される。各項目に対して，1：まったくあてはまらない，2：あてはまらない，3：あまりあてはまらない，4：少しあてはまる，5：よくあてはまる，6：とてもよくあてはまる，の6件法で回答を求めた。

3) 自尊感情尺度

（福岡県青少年アンビシャス運動推進室，2010）

福岡県青少年アンビシャス運動推進室（2010）が，Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の項目を児童にもわかりやすく翻訳したもので，肯定的な5つの設問と否定的な5つの設問からなる（表5）。各項目に対して，1：まったくあてはまらない，2：あてはまらない，3：あまりあてはまらない，4：少しあてはまる，5：よくあてはまる，6：とてもよくあてはまる，の6件法での評定を求めた。

なお，1) 「生きる力」：「IKR 評定用紙（簡易版）」，2) 少年期（高学年）のリーダーシップ測定尺度，および，3) 自尊感情尺度は，事前調査と事後調

表 4 少年期（高学年）のリーダーシップ測定尺度（国立妙高青少年自然の家，2011）

上位指標	中位指標	下位指標	項目	
少年期（高学年）のリーダーシップ測定尺度	課題達成機能	困難に自ら立ち向かおうとする力	1 意欲・自立性	(1) 人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる。 (2) すずんでお手伝いや勉強をすることができる。 (3) 危ないことを予測して避けることができる。 (4) その場の状況にあわせて考えることができる。
			2 危機意識	(5) 決めた時間にあわせて行動することができる。 (6) 先のことを考えて行動することができる。
		計画的に考え行動する力	3 計画・判断	(7) 内容を考えて話すことができる。 (8) 反省したことを次の行動や活動に生かしている。
			4 省察・アクション	(9) 物事をいろいろな方向から見ることができる。 (10) わからないことは自分で調べることができる。 (11) うまくいくようにいろいろな工夫をすることができる。 (12) 興味のあることにチャレンジしてみたい。
	集団維持機能	情報を収集し、創造力をもって課題を解決しようとする力	5 情報収集	(13) 自分がすべき役割をはっきりわかっている。 (14) 全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる。
			6 想像力	(15) ルールや約束を必ず守ることができる。 (16) 親や先生に言われなくても規則にしたがうことができる。 (17) 困っている友だちがいいたら励ますことができる。 (18) 友だちの立場に立って話を聞くことができる。 (19) 明るく元気にあいさつや返事ができる。 (20) 場を和ますことができる。
		役割を意識し、集団の規範を守る力	7 役割意識	
			8 規範意識	
		集団内の人間関係を円滑にしようとする力	9 伝達・コミュニケーション	
			10 ユーモア・明るさ	

表 5 自尊感情尺度（福岡県青少年アンビシャス運動推進室，2010）

1	すべての点で自分に満足している。	P
2	ときどき「自分はだめだなあ」と思うことがある。	N
3	いくつかの点で見どころがあると思っている。	P
4	友だちがやるのと同じくらいにいろいろなことができる。	P
5	あまり得意なことがない。	N
6	ときどき「役に立っていないなあ」と感じることもある。	N
7	少なくとも自分がほかの人と同じくらい価値ある人だと思う。	P
8	もっと自分を尊敬できたらいいと思う。	N
9	何をやっても失敗するのではないかと恐ってしまう。	N
10	自分のことを積極的に認めている。	P

注：Pは肯定的項目、Nは否定的項目（逆転項目）

査の両調査において共通して用いた。

4) フェイスシート

事前調査では、①スカウト経験（年数）②スカウトを始めた部門③スカウト活動の楽しさ④自信・興味のあるスカウト技能⑤現在の級⑥進級の希望⑦所属・自隊での役務・氏名・年齢・性別⑧調査の感想・質問への回答を求めた。

事後調査では、①楽しかったプログラム②自信・興味が出たスカウト技能③訓練キャンプの楽しさ④来年後輩に参加を勧める程度⑤進級の希望⑥所属・自隊での役務・氏名・年齢・性別⑦調査の感想・質問への回答を求めた。

3. 結果

(1) 回収率、および、調査対象者について

回収率は、事前調査 100%（18/18）、事後調査 88.9%（16/18）であった。また、調査対象者の平

均年齢は、事前調査時 13.8 歳（SD=0.4 歳）、事後調査時 13.8 歳（SD=0.4 歳）であった。性別は、事前調査は、男子 16 人（88.9%）、女子 2（11.1%）、事後調査は、男子 14 人（87.5%）、女子 2（12.5%）であった。

(2) 調査対象者のスカウト経験、スカウト活動に対する楽しさについて

調査対象者のスカウト経験は、1 年が 1 人（5.6%）、2 年が 1 人（5.6%）、5 年が 6 人（33.3%）、7 年が 5 人（27.8%）、8 年が 4 人（22.2%）、9 年が 1 人（5.6%）であった。スカウト活動を始めた部門は、ビーバースカウト（幼稚園年長から小学 2 年）からが 10 人（55.6%）、カブスカウトからが 6 人（33.3%）、ボーイスカウトからが 2 人（11.1%）であった。自隊での役務は、班長が 4 名（22.2%）、次長が 8 名（44.4%）、その他が 6 名（33.3%）であった。

(3) スカウト活動に対する楽しさについて

ボーイスカウト活動に対する楽しさについては、まあ楽しいが5人(27.8%)、楽しいが8人(44.4%)、とても楽しいが4人(22.2%)、無回答が1人(5.6%)であり、無回答を除く全員(94.4%)がスカウト活動は楽しいと感じていた(図1)。

(4) 訓練キャンプの感想：楽しさ、参加の意義について

訓練キャンプに参加して楽しかったかどうかについては、まあ楽しかったが5人(27.8%)、楽しかったが5人(27.8%)、とても楽しかったが6人

(33.3%)、無回答が2人(11.1%)と、無回答を除くすべてのスカウトが楽しかったという感想を持ち、その約3割(33.3%)がとても楽しかったと感じていた(図2)。

また、訓練キャンプへの参加の意義について、「後輩に来年の訓練キャンプへの参加をすすめますか?」と尋ねたところ、まあすすめるが6人(33.3%)、すすめるが3人(16.7%)、絶対すすめるが7人(38.9%)、無回答が2人(11.1%)と、無回答を除くすべてのスカウトが参加の意義を感じていた(図3)。

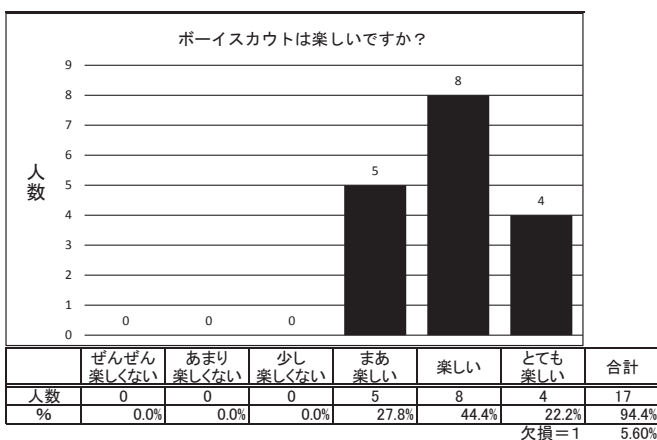


図1 ボーイスカウト活動に対する楽しさ

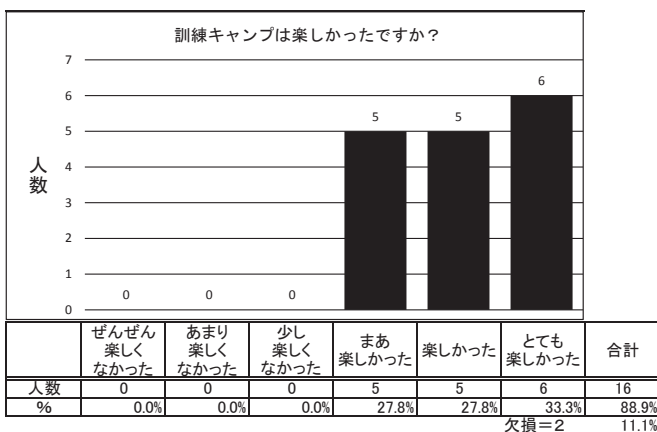


図2 訓練キャンプの感想：楽しさ

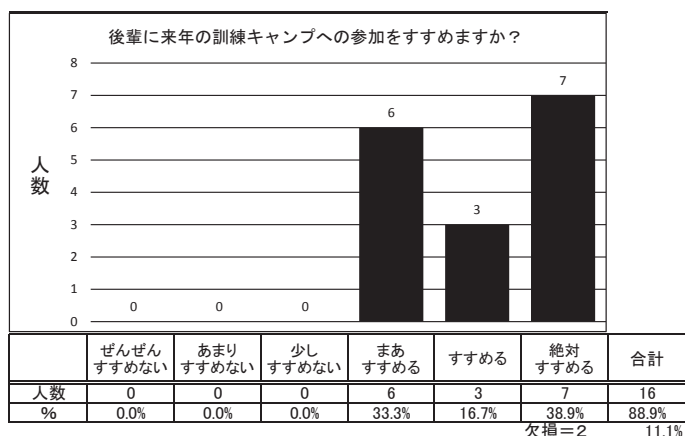


図3 訓練キャンプの感想：参加意義

(5) 訓練キャンプ参加前後の「スカウト技能への興味・自信」の変化について

訓練キャンプ参加の前後で、興味や自信が高まったスカウト技能は、ロープ（事前：1人→事後：3人）、火起こし（事前：8人→事後：12人）、野外料理（事前：7人→事後：8人）、野営法（テント）（事前：3人→事後：5人）であった（図4）。

(6) 訓練キャンプ参加前後の「進級目標」の変化について

訓練キャンプ参加の前後で、進級目標が高まっ

たかどうかについて、調査前のスカウトは、初級が4人、2級が11人、1級が1人、菊スカウトが2人であった。これらのスカウトが、何級まで進級したいかという進級目標の高まりは、訓練キャンプ参加の前後で、1級までは、事前事後共に3人、菊章までが10人から4人へ、バンチャー章までが1人から4人へ、富士章までが4人から5人へという変化があった。すなわち、事前調査時は、ボーイスカウト部門の最高位である菊章までの進級目標が多かったが、事後調査時には、バンチャー章やボーイスカウトにおける最高位である富士章

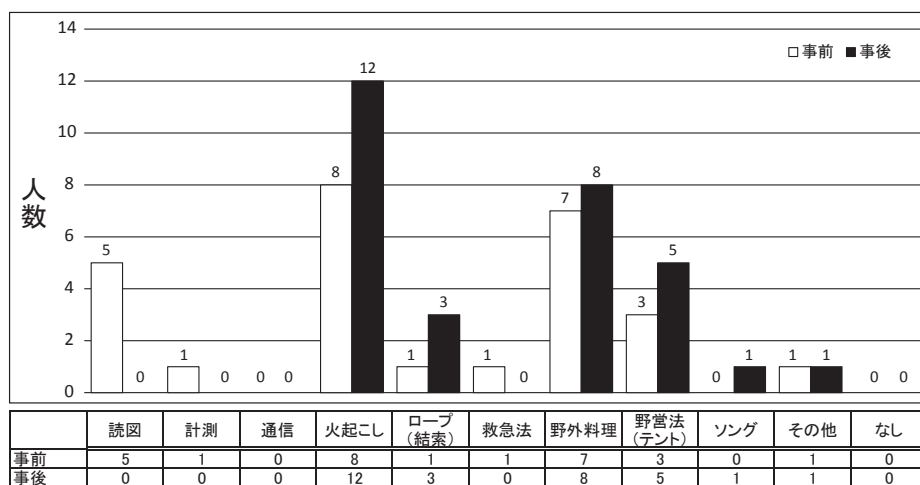


図4 訓練キャンプ参加前後のスカウト技能への興味・自信の変化

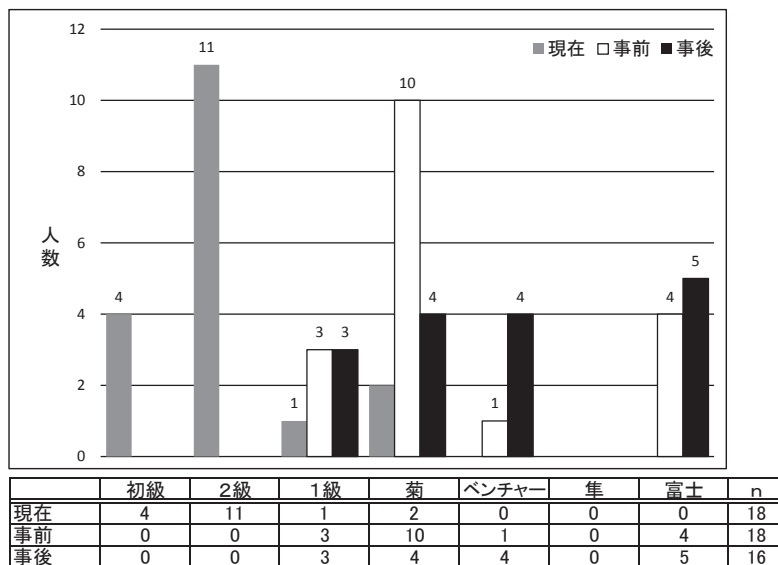


図5 訓練キャンプ参加前後の進級目標の変化

への進級目標が増えた。つまり、訓練キャンプの参加前より参加後は、ベンチャースカウトへの上進を目標とするようになったと解釈できる(図5)。

(7) 訓練キャンプ参加前後の「生きる力」の変化に関する2014年度と2015年度の比較

訓練キャンプ参加前後の「生きる力」の変化について、2014年度(田中,2016)と2015年度とを比較してみると、2014年度は、「IKR 評定用紙」の「生きる力」においては、訓練キャンプ参加前と参加後で得点の有意な差は認められなかった($t(12)=0.15, n.s.$)。また、上位能力の「心理的社会的能力」について、訓練キャンプ参加前と参加後で得点の有意な差は認められなかったが($t(13)=0.33, n.s.$)、その下位能力「明朗性」の「失敗しても、立ち直るのがはやい」の項目において、参加前(3.7($SD=1.3$))より参加後(4.1($SD=1.5$))の得点が有意に高く($t(17)=2.72, p<.05$)、能力が有意に向上していると判断された。しかし、下位能力「交友・協調」の「多くの人に好かれている」の項目において、参加前(3.6($SD=1.2$))より参加後(3.2($SD=1.2$))の得点が有意に低く($t(18)=2.14, p<.05$)、能力が低下していると判断された。

また、上位能力の「身体的能力」については、下位能力の「日常的行動」においてのみ、参加前(6.6($SD=2.3$))より参加後(7.2($SD=1.6$))の得点が有意に高い傾向があった($t(17)=1.34, p<.10$)。

一方、2015年度では、「生きる力」において、訓練キャンプ参加前と参加後で得点の有意な差は認められなかった($t(15)=1.34, n.s.$)。しかし、上位能力の「心理的社会的能力」で参加前(52.9($SD=9.8$))より参加後(55.9($SD=12.6$))の得点が有意に高い傾向($t(15)=1.78, p<.10$)があり、その下位能力の「現実肯定」で参加前(7.2($SD=2.2$))より参加後(8.3($SD=2.6$))の得点が有意に高く($t(15)=2.76, p<.01$)、その下位項目の「自分のことが大好きである」において、参加前(3.3($SD=1.2$))より参加後(3.9($SD=1.3$))の得点が有意に高かく($t(15)=2.44, p<.05$)、「だれにでも、あいさつができる」において、参加前(3.9($SD=1.3$))より参加後(4.4($SD=1.5$))の得点が有意に高い傾向があった($t(15)=1.83, p<.10$)。また、同じく下位能力の「視野・判断」で参加前(7.2($SD=1.6$))より参加後(8.1($SD=2.0$))の得点が有意に高く($t(15)=2.15, p<.05$)、その下位項目の「先を見通して、自分で計画が立てられる」において、参加前(3.6

(SD=0.7) より参加後 (3.9 (SD=1.1)) の得点が有意に高い傾向があった ($t(15) = 1.86, p < .10$)。また、同じく下位能力の「適応行動」で参加前 (7.8 (SD=1.4)) より参加後 (8.3 (SD=1.5)) の得点が有意に高い傾向があった ($t(15) = 1.73, p < .10$)。また、下位能力の「明朗性」には参加前と後で有意な差はなかったが ($t(15) = 1.21, n.s.$)、その下位項目の「誰にでも話しかけることができる」において、参加前 (3.3 (SD=1.1)) より参加後 (3.8 (SD=1.4)) の得点が有意に高かった ($t(15) = 2.24, p < .05$)。また、上位能力の「徳育的能力」については、参加

前 (30.7 (SD=5.7)) より参加後 (32.8 (SD=6.6)) の得点が有意に高い傾向があった ($t(15) = 1.98, p < .10$)。また、下位能力の「自然への関心」で、参加前 (7.2 (SD=2.4)) より参加後 (8.4 (SD=2.6)) の得点が有意に高く ($t(15) = 3.45, p < .001$)、その下位項目の「季節の変化を感じることができる」において、参加前 (3.5 (SD=1.5)) より参加後 (4.4 (SD=1.5)) の得点が有意に高かった ($t(15) = 3.95, p < .001$)。また、上位能力の「身体的能力」については、いずれの下位能力も下位項目においても、有意な差はみられなかった (表 6)。

表 6 「生きる力」の変化 (事前調査 vs 事後調査) の 2014 年度と 2015 年度の比較 t 検定結果

	2014年度(田中2016)						2015年度							
	事前調査		事後調査		t値	df	p	事前調査		事後調査		t値	df	p
	平均	SD	平均	SD				平均	SD	平均	SD			
生きる力	115.6	17.6	114.8	15.4	0.15	12	.88	105.7	16.9	110.0	23.1	1.34	15	.20
心理的社会的能力	56.1	10.7	56.9	9.1	0.33	13	.75	52.9	9.8	55.9	12.6	1.78	15	.09
非依存	8.4	2.2	8.4	1.8	0.00	16	1.00	8.1	2.3	7.9	2.4	0.54	15	.60
	4.1	1.4	4.5	1.0	0.96	16	.35	4.0	1.4	4.1	1.3	0.22	15	.83
	4.2	1.3	3.8	1.3	1.59	18	.13	4.1	1.1	3.8	1.2	1.16	15	.26
積極性	7.7	1.9	8.1	1.6	0.92	17	.37	7.8	1.5	8.1	1.7	1.23	15	.24
	3.8	1.2	4.1	1.1	0.85	17	.41	3.7	0.8	3.8	0.8	0.70	15	.50
	3.8	1.0	4.1	0.8	1.07	18	.30	4.1	1.0	4.3	1.1	1.14	15	.27
明朗性	7.6	2.5	8.0	2.7	1.37	17	.19	7.4	1.9	7.9	2.4	1.21	15	.25
	3.8	1.4	4.0	1.6	0.57	18	.58	3.3	1.1	3.8	1.4	2.24	15	.04
	3.7	1.3	4.1	1.5	2.72	17	.02	4.1	1.0	4.2	1.2	0.19	15	.85
交友・協働	7.7	2.1	7.5	1.8	0.50	18	.63	7.4	2.1	7.3	2.8	0.24	15	.81
	3.6	1.2	3.2	1.2	2.14	18	.05	3.4	1.1	3.6	1.4	0.72	15	.48
	4.1	1.3	4.3	0.9	0.87	18	.40	4.0	1.2	3.7	1.6	0.89	15	.39
現実肯定	8.2	2.3	8.1	1.9	0.31	18	.76	7.2	2.2	8.3	2.6	2.76	15	.01
	3.4	1.5	3.3	1.4	0.52	18	.61	3.3	1.2	3.9	1.3	2.44	15	.03
	4.8	1.1	4.8	0.9	0.00	18	1.00	3.9	1.3	4.4	1.5	1.83	15	.09
視野・判断	7.2	2.2	7.6	1.9	0.79	17	.44	7.2	1.6	8.1	2.0	2.15	15	.05
	3.3	1.0	3.7	1.0	1.33	17	.20	3.6	0.7	3.9	1.1	1.86	15	.08
	3.9	1.3	4.0	1.1	0.16	18	.88	3.6	1.1	4.1	1.3	1.33	15	.20
適応行動	7.7	1.5	8.0	1.4	0.84	18	.41	7.8	1.4	8.3	1.5	1.73	15	.10
	3.9	1.0	4.2	1.1	1.05	18	.31	3.9	1.0	4.1	1.0	1.46	15	.16
	3.8	0.9	3.8	0.8	0.21	18	.83	3.9	0.7	4.2	0.8	0.94	15	.36
徳育的能力	33.4	5.0	33.3	4.4	0.08	17	.94	30.7	5.7	32.8	6.6	1.98	15	.07
自己規制	7.3	2.4	7.5	1.8	0.40	18	.69	7.8	1.8	7.9	1.7	0.32	15	.76
	3.9	2.0	4.0	1.2	0.25	18	.80	3.9	1.0	3.9	1.3	0.32	15	.75
	3.4	1.4	3.6	1.5	0.36	18	.72	3.9	1.5	3.9	1.1	0.17	15	.87
自然への関心	8.6	1.1	8.8	2.0	0.58	17	.57	7.2	2.4	8.4	2.6	3.45	15	.00
	3.9	1.0	3.9	1.3	0.00	18	1.00	3.7	1.3	4.0	1.3	1.58	15	.14
	4.6	0.9	4.9	1.2	1.68	17	.11	3.5	1.5	4.4	1.5	3.95	15	.00
まじめ勤勉	8.5	1.8	8.3	1.2	0.53	18	.60	8.2	1.5	8.8	1.6	1.62	15	.13
	4.0	1.3	4.0	0.8	0.00	18	1.00	3.7	0.9	4.0	1.0	1.10	15	.29
	4.5	1.1	4.3	0.7	0.89	18	.38	4.5	0.9	4.8	0.9	1.78	15	.10
思いやり	8.6	1.6	8.7	1.6	0.35	18	.73	7.6	2.2	7.8	2.1	0.39	15	.70
	4.3	0.9	4.4	1.0	0.29	18	.77	3.7	1.3	3.9	1.1	0.62	15	.54
	4.3	0.9	4.4	1.1	0.25	18	.80	3.9	1.1	3.8	1.5	0.27	15	.79
身体的能力	21.8	6.0	23.8	3.5	1.34	17	.20	22.1	4.3	21.3	5.7	0.86	15	.40
日常的行動力	6.6	2.3	7.2	1.6	1.84	18	.08	6.9	1.5	6.4	1.9	0.96	15	.35
	3.3	1.6	3.8	1.1	1.93	18	.69	3.6	1.2	3.2	1.2	1.10	15	.29
	3.3	1.2	3.4	1.2	0.29	18	.77	3.6	1.2	3.2	1.2	0.29	15	.77
身体的耐性	7.2	2.0	8.2	1.8	1.30	17	.21	7.4	2.0	7.1	2.7	0.75	15	.46
	3.7	1.1	4.1	1.3	1.04	18	.32	3.5	1.2	3.4	1.5	0.62	15	.54
	3.6	1.4	4.1	0.9	1.34	17	.20	3.9	1.3	3.8	1.4	0.56	15	.58
野外技能・生活	7.8	2.4	8.2	1.8	0.70	18	.49	7.8	1.7	7.8	2.0	0.17	15	.86
	3.9	1.4	4.1	1.1	0.62	18	.54	4.1	0.9	3.9	0.9	0.90	15	.38
	3.9	1.3	4.1	1.0	0.62	18	.54	3.7	1.1	3.8	1.5	0.62	15	.54

(8) 訓練キャンプ参加前後の「リーダーシップ能力」の変化に関する2014年度と2015年度の比較

2014年度は、「リーダーシップ能力」について、訓練キャンプ参加前と参加後の得点に有意な差は認められなかった ($t(15)=1.12, n.s.$)。また、リーダーシップのPM理論(三隅, 1978)のP機能, すなわち, 上位指標の「課題達成機能」については訓練キャンプ参加前と参加後の得点に有意な差は認められなかった ($t(18)=0.99, n.s.$)。しかし、「課題達成機能」の中位指標の「困難に自ら立ち向かうとする力」の下位指標の「意欲・自立性」については、参加前(7.6 ($SD=2.1$))より参加後(6.7 ($SD=2.0$))の得点が有意に低く ($t(18)=2.07, p<.05$)、「意欲・自立性」が有意に低下していると判断された。M機能, すなわち, 上位指標の「集団維持機能」については参加前(32.1 ($SD=5.5$))より参加後(34.1 ($SD=6.0$))の得点が有意に高く ($t(18)=2.80, p<.01$)、集団維持機能のリーダーシップ能力が有意に向上していると判断された。さらに、「集団維持機能」の中位指標の「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」は参加前(15.8 ($SD=3.4$))より参加後(17.2 ($SD=3.6$))の得点が有意に高く ($t(18)=2.96, p<.01$)、その下位指標である「ユーモア・明るさ」は参加前(7.7 ($SD=1.7$))より参加後(8.8 ($SD=2.0$))の得点が有意に高く ($t(18)=4.60, p<.001$)、さらに、「ユーモア・明るさ」についての項目レベルでは「場を和ませることができる」は参加前(3.4 ($SD=1.2$))より参加後(4.2 ($SD=1.2$))の得点が有意に高かった ($t(18)=3.34, p<.001$) (表7)。

一方、2015年度は、「リーダーシップ能力」について、訓練キャンプ参加前と参加後の得点に有意な差は認められなかった ($t(15)=1.61, n.s.$)。また、上位指標の「課題達成機能」については訓練キャンプ参加前と参加後の得点に有意な差は認められなかった ($t(15)=1.49, n.s.$)。しかし、「課題達成機能」の中位指標の「困難に自ら立ち向かうとする力」の下位指標の「意欲・自立性」において、参加前(6.2 ($SD=2.2$))より参加後(7.4 ($SD=2.3$))の得点が有意に高い傾向にあり ($t(15)$

$=2.08, p<.10$)、その下位項目の「人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる。」で、参加前(3.0 ($SD=1.1$))より参加後(3.7 ($SD=1.1$))で ($t(15)=1.79, p<.10$)、また、「すすんでお手伝いや勉強をすることができる。」で、参加前(3.2 ($SD=1.4$))より参加後(3.8 ($SD=1.5$))で ($t(15)=1.86, p<.10$)、それぞれ得点が有意に高い傾向があった。また、中位指標の「計画的に考え行動する力」において、参加前(14.6 ($SD=3.2$))より参加後(16.1 ($SD=3.0$))の得点が有意に高い傾向にあった ($t(15)=1.78, p<.10$)。また、その下位指標の「省察・アクション」において、参加前(7.3 ($SD=2.2$))より参加後(8.5 ($SD=1.7$))の得点が有意に高い傾向にあり ($t(15)=1.82, p<.10$)、その下位項目の「内容を考えて話すことができる。」で、参加前(3.4 ($SD=1.2$))より参加後(4.1 ($SD=1.0$))で、得点が有意に高い傾向があった ($t(15)=1.79, p<.10$)。また、中位指標「情報を収集し、想像力をもって課題を解決しようとする力」の下位指標「想像力」の下位項目「興味のあることにチャレンジしてみたい」で参加前(4.4 ($SD=1.0$))より参加後(4.9 ($SD=1.1$))で、得点が有意に高い傾向があった ($t(15)=1.82, p<.10$)。M機能, すなわち, 上位指標の「集団維持機能」については参加の前後で得点の有意な差はなかった ($t(15)=1.51, n.s.$)が、中位指標「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」の下位指標「ユーモア・明るさ」で、参加前(7.4 ($SD=2.2$))より参加後(8.1 ($SD=2.9$))の得点が有意に高い傾向にあり ($t(15)=1.96, p<.10$)、その下位項目の「場を和ませることができる」で、参加前(3.5 ($SD=1.2$))より参加後(3.9 ($SD=1.5$))の得点が有意に高い傾向にあった ($t(15)=1.86, p<.10$)。また、中位指標「役割を意識し、集団の規範を守る力」の下位指標「役割意識」の下位項目「全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる。」で参加前(3.7 ($SD=0.8$))より参加後(4.3 ($SD=0.9$))の得点が有意に高い傾向にあった ($t(15)=1.86, p<.10$) (表7)。

(9) 訓練キャンプ参加前後の「自尊感情」の変化 「自尊感情尺度」については、2014年度も ($t(18)$

表 7 「リーダーシップ能力」の変化（事前調査 vs 事後調査）の 2014 年度・2015 年度の比較 t 検定結果

	2014年度(田中,2016)							2015年度						
	事前調査		事後調査		t値	df	p	事前調査		事後調査		t値	df	p
	平均	SD	平均	SD				平均	SD	平均	SD			
リーダーシップ	82.1	12.6	84.4	11.8	1.12	15	.28	75.0	12.1	80.8	16.0	1.61	15	.13
課題達成(Performance)機能	47.8	8.7	46.3	9.2	0.99	18	.34	44.6	8.5	48.4	8.8	1.49	15	.16
困難に自ら立ち向かおうとする力	15.7	3.8	14.9	3.5	1.20	18	.24	13.9	3.5	14.9	4.3	1.07	15	.30
意欲・自立性	7.6	2.1	6.7	2.0	2.07	18	.05	6.2	2.2	7.4	2.3	2.08	15	.06
人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる。	3.8	1.1	3.4	1.0	1.59	18	.13	3.0	1.1	3.7	1.1	1.79	15	.09
すずんでお手伝いや勉強をすることができる。	3.8	1.2	3.3	1.2	1.82	18	.86	3.2	1.4	3.8	1.5	1.86	15	.08
危機意識	8.1	2.0	8.2	2.0	0.29	18	.77	7.7	2.2	7.5	2.6	0.29	15	.78
危ないことを予測して避けることができる。	3.9	1.0	4.1	1.3	0.83	18	.42	3.8	1.4	3.8	1.7	0.12	15	.90
その場の状況にあわせて考えることができる。	4.2	1.0	4.1	0.9	0.21	18	.83	3.9	0.9	3.7	1.3	1.17	15	.26
計画的に考え行動する力	14.9	3.2	15.1	3.6	0.16	18	.88	14.6	3.2	16.1	3.0	1.78	15	.10
計画・判断	7.4	1.5	7.3	1.9	0.25	18	.81	7.4	1.3	7.6	1.7	0.78	15	.45
決めた時間にあわせて行動することができる。	3.9	0.9	3.7	1.0	0.85	18	.41	3.9	0.8	3.9	1.1	0.29	15	.77
先のことを考えて行動することができる。	3.5	1.1	3.6	1.1	0.37	18	.72	3.5	1.0	3.7	0.9	1.00	15	.33
省察・アクション	7.5	1.8	7.7	2.0	0.56	18	.59	7.3	2.2	8.5	1.7	1.82	15	.09
内容を考えて話すことができる。	3.8	1.0	3.8	1.0	0.00	18	1.00	3.4	1.2	4.1	1.0	1.79	15	.09
反省したことを次の行動や活動に生かしている。	3.7	0.9	3.9	1.2	0.85	18	.41	3.8	1.3	4.4	1.0	1.35	15	.20
情報を収集し、創造力をもって課題を解決しようとする力	17.3	3.0	17.2	2.7	0.17	15	.87	16.6	3.3	17.4	2.7	1.35	15	.20
情報収集	8.1	2.3	8.2	1.6	0.27	16	.79	7.8	2.1	8.3	1.7	0.88	15	.40
物事をいろいろな方向から見るができる。	3.8	1.1	3.9	0.9	0.20	18	.85	3.9	1.0	3.9	1.3	0.24	15	.82
わからないことは自分で調べることができる。	4.3	1.4	4.3	1.2	0.00	18	1.00	3.9	1.2	4.3	0.9	1.03	15	.32
想像力	9.2	1.2	8.7	1.7	1.58	17	.13	8.3	1.5	9.1	1.6	1.80	15	.13
うまくいくようにいろいろな工夫をすることができる。	4.1	0.8	4.2	0.9	0.33	18	.75	3.8	0.8	4.3	0.9	1.28	15	.22
興味のあることにチャレンジしてみたい。	5.1	0.7	4.7	1.0	1.72	17	.10	4.4	1.0	4.9	1.1	1.82	15	.09
集団維持(Maintenance)機能	32.1	5.5	34.1	6.0	2.80	18	.01	30.4	5.7	32.4	7.5	1.51	15	.15
役割を意識し、集団の規範を守る力	16.3	3.5	16.9	2.9	1.10	18	.29	15.8	2.7	16.8	3.1	1.20	15	.25
役割意識	7.9	2.1	8.4	1.7	1.19	18	.25	7.4	1.8	8.4	1.6	1.46	15	.17
自分がするべき役割をはっきりわかっている。	4.1	1.4	4.3	0.9	0.89	18	.39	3.8	1.1	4.1	0.9	1.00	15	.33
全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる。	3.9	1.0	4.1	1.0	1.07	18	.30	3.7	0.8	4.3	0.9	1.86	15	.08
規範意識	8.4	1.8	8.5	1.7	0.53	18	.60	8.4	1.9	8.4	2.0	0.00	15	1.00
ルールや約束を必ず守ることができる。	4.3	1.0	4.4	0.8	0.57	18	.58	4.3	0.9	4.2	1.0	0.39	15	.72
親や先生に言われなくても規則にしたがうことができる。	4.1	1.0	4.2	1.0	0.25	18	.80	4.1	1.1	4.2	1.2	0.25	15	.81
集団内の人間関係を円滑にしようとする力	15.8	3.4	17.2	3.6	2.96	18	.01	14.6	3.5	15.6	5.1	1.27	15	.23
伝達・コミュニケーション	8.1	1.9	8.4	1.9	0.88	18	.39	7.3	1.7	7.5	2.6	0.50	15	.63
困っている友だちがいたら励ますことができる。	4.3	1.2	4.5	1.3	0.85	18	.41	3.8	1.2	3.9	1.5	0.46	15	.65
友だちの立場に立って話を聞くことができる。	3.8	1.1	3.9	0.8	0.44	18	.67	3.5	1.2	3.6	1.5	0.44	15	.67
ユーモア・明るさ	7.7	1.7	8.8	2.0	4.60	18	.00	7.4	2.2	8.1	2.9	1.96	15	.07
明るく元気にあいさつや返事ができる。	4.3	1.0	4.6	1.1	1.10	18	.29	3.9	1.3	4.3	1.4	1.57	15	.14
場を和ますことができる。	3.4	1.2	4.2	1.2	3.34	18	.00	3.5	1.2	3.9	1.5	1.86	15	.08

表 8 「自尊感情」の変化（事前調査 vs 事後調査）の 2014 年度と 2015 年度の比較

	2014年度(田中,2016)							2015年度						
	事前調査		事後調査		t値	df	p	事前調査		事後調査		t値	df	p
	平均	SD	平均	SD				平均	SD	平均	SD			
自尊心	29.6	8.7	31.1	7.3	0.90	18	.38	32.8	6.1	34.7	10.3	1.25	15	.23

=0.90, n.s.), 2015 年度も ($t(15) = 1.25, n.s.$), いずれも参加の前後で、有意な得点の差は認められなかった。

4. 考察

(1) 調査対象者の特徴

本調査の調査対象者は、平均年齢 14 歳で、性別はほとんどが男子（事前：88.9%：16 名 / 18 名・事後：87.5%：14 名 / 16 名）、小学校以後のスカウト経験（ビーバースカウト：55.6%、カブスカウト：33.3%、ボーイスカウト：11.1%）を有するグリーンバースカウトが約 7 割（班長 4 名（22.2%）と次長 8 名（44.4%））であり、調査対

象者の9割以上(94.4%)がスカウト活動は楽しいと感じていた。すなわち、本調査結果は、小さい時から楽しくスカウト活動をおこなってきた男子の班長・次長クラスのグリーンバースカウトに関するものである。これは、田中(2016)とほぼ同じ特徴である。

(2) 訓練キャンプ参加後の感想・参加意義、「スカウト技能への興味・自信」、「進級目標」の変化
訓練キャンプに参加したすべてのスカウトが、訓練キャンプは楽しく、そのうち約3割(33.3%)はとても楽しかったと感じており、9割以上(94.2%)が「後輩にも参加をすすめる」と参加の意義を感じていた。また、訓練キャンプに参加して、ロープ、火起こし、野外料理、野営法のスカウト技能への興味や自信が高まり、より上のランクへの進級を目指すようになった。これらも田中(2016)とほぼ同様の傾向を示していた。

訓練キャンプの「生きる力」「リーダーシップ」「自尊心」への効果について、2014年度(田中, 2016)と2015年度の調査結果を比較してみる。

(3) 訓練キャンプの「生きる力」への効果

「生きる力」は、2014年度においては、上位能力「心理社会的能力」の下位能力「明朗性」の下位項目である「失敗しても、立ち直るのがはやい」という能力が、キャンプ参加の前後において有意に高まり、また、上位能力「身体能力」の下位能力の「日常的行動力」が有意に高まる傾向があった。すなわち、心身共に、ポジティブに対応できる能力が向上したといえる。一方、2015年度においては、上位能力「心理社会的能力」が高まる傾向にあり、その下位能力の「現実肯定」、および、その下位項目である「自分のことが大好きである」や「だれにでもあいさつができる」や、下位能力「視野・判断」、および、その下位項目の「先を見通して、自分で計画が立てられる」、また、下位能力の「適応行動」などの能力が高まり、さらに、上位能力の「徳育的能力」が高まる傾向にあり、その下位能力の「自然への関心」とその

下位項目の「季節の変化を感じることができる」という能力が高まることが明らかになった。つまり、明るく、自己肯定的で、現実的に物事を計画することができる能力や自然の変化を敏感に感じることができる能力が向上したといえる。ただ、2015年度にこれらの能力が高まったことについては、2015年度の訓練キャンプは、初日は、雪が積もるテントサイトでの設営から始まり、2日目、3日目と雪も溶け、まさにキャンプ期間中に季節の移り変わりを体験したことになり、その影響が少なからず影響している可能性がある。

2014年と2015年に共通して向上する能力は、心理社会的能力であり、自己を肯定的に捉える能力が高まることが明らかになったといえる。

(4) 訓練キャンプの「リーダーシップ」への効果

「リーダーシップ」は、2014年度においては、主に、リーダーシップのM機能である、「集団維持機能が高まった。中でも、“場を和ませることができる”といった、「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」や、「ユーモアや明るさ」といったリーダーシップや社会的スキルが向上したことは、野外でスカウト技能を競うゲーム(計測、火熾し、ロープ結び、料理コンテスト)や営火(キャンプファイヤー)などでの“楽しさ”を通じて得られたものであると考えられる。すなわち、スカウト教育において、活動は、スカウトにとって楽しいゲームという要素を基本としており、スカウト達は、スカウティングという楽しいゲームに熱中する間に、ひとりでの、「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」の社会人に必要な4つの資質を高めていくとされている。スカウトは、楽しいゲーム活動を通して、「集団の人間関係を円滑にしようとする力」、「ユーモア・明るさ」「場を和ませることができる」といったリーダーシップや社会的スキルを高めたと考えられる。

一方、2015年度においては、2014年度と同様、集団維持機能の“場を和ませることができる。”という「ユーモア・明るさ」といったリーダーシップや能力が向上することが示唆されたが、統計的には、有意傾向に留まった。同様に、課題達成機

能の“人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる。”や“すすんでお手伝いや勉強をすることができる。”といった「意欲・自立性」、 “内容を考えて話すことができる。”といった「省察・アクション」などの「計画的に考えて行動する力」、 “興味のあることにチャレンジしてみたい。（「想像力」）なども、有意傾向に留まり、2015年度においては、リーダーシップや社会的スキルは、2014年ほどは高まったとは言いがたい。

(5) 訓練キャンプの「自尊感情」への効果

「自尊感情」については、2014年度、および、2015年度の両年度とも、キャンプ参加の前後において、体験活動の影響はみられなかった。

(6) 本研究の問題と今後の課題

最後に、本研究の問題と今後の課題について述べる。

まず、問題点としては、調査対象者数の少なさ、代表性、男女比などのサンプリングの問題がある。理想的には、全国規模での調査において、ボーイスカウト日本連盟が区分としている県連ブロックごとでの加盟登録者の比率によるサンプリングをおこなうなどの調査が望まれる。加えて、本調査においては、単発的な混成隊における訓練キャンプでの体験活動であった。よって本調査の結果を、より日常的なスカウト教育の効果に一般化することには注意が必要である。より日常的なスカウト教育の効果を見るためには、普段の隊における活動について、多様な地域、多様な年齢や性別のスカウトを対象とした、より長期的、継続的な調査の実施と、そこから得られた多様な側面に関する質的、および、量的データによる実証的研究が望まれる。

文献

独立行政法人国立青少年教育振興機構 (2010). 体験活動による「生きる力」の変容が見える！ 「生きる力の測定・分析ツール」 独立行政法人国立青少年教育振興機構.

- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2010). 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究 福岡県青少年アンビシャス運動特別レポート 福岡県青少年アンビシャス運動推進室.
- 国立妙高青少年自然の家 (2011). 少年期 (高学年) のリーダーシップ想定尺度活用術 <<http://myoko.niye.go.jp/result/H23/leadership.pdf>> (2015年2月3日)
- 三隅二不二 (1978). リーダーシップ行動の科学 有斐閣
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent selfimage*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 田中優 (2016). ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響 人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要, 17, 1-14.

謝辞

本調査の実施において、日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区の石橋朋広副コミッショナー (BS 担当)、2015年度新多磨地区 BS 山中訓練キャンプの指導者の皆さんに多大なご協力を賜りました。また、研究の目的を理解し、調査に協力してくれたスカウトに深く感謝申し上げます。彌榮。

